

戦争を「引き受け直す」こと 菅原百合絵

五月に発行された『現代短歌』一〇九号に「タイムスリップ1944」という特集が組まれている。特集の趣旨は、ある朝目覚めると戦時下にタイムスリップしていたと想定したうえで「今置かれている状況（シナリオ）を記し、その状況下で十二首を構成してください」というものだ。この依頼に対して、二十人の歌人がシナリオと連作を寄せている。戦争を体験した自分の親戚に生まれ変わったもの、インパール作戦従軍中の兵になったもの、山西省で宮柊二と同じ部隊に配属されているもの……などさまざま設定で歌が詠まれている。

・昼夜なき行軍と戦闘くりかへしだいに獣じみてゆく兵

桑原正紀「山西省にて」

・水に顔 的なないじめの 水の中 みたいな時代で息をするには？
伊舎堂仁「戦争を知らない中年たち」

・花のように街は袂は袂け開けられてゆく死という爪を立てられながら
大松達知「鈍色の十字架」

一首目は「ぬむりをる體の上を夜の獣穢れてとほれり通らしめつつ」〔宮柊二『山西省』〕のリアリティを伝えようとする歌だ。伊舎堂の歌は、連作を通じて現代の息苦しさや戦時中の閉塞感をオーバーラップさせようとする試み。三首目では東京大空襲が描かれている。美しい比喩が人々を蹂躪しつくした災禍の惨さを逆

説的に浮かび上がらせる。

自分が生きている「今・ここ」ではないところに生を営んでいた、別の存在になり代わって詠う、という挑戦的な連作群である。こうしたコンセプトはたとえば近年では千種創一「つぐ」〔『あやとり』短歌研究社、二〇二五年所収〕にも見られるが、ここには戦争体験を風化させないという以上に、いかにしてそうした過去の集合的記憶を自分ごととして引き受け直すか、という問題意識が見て取れる。自分とは異なる存在になって、世界の悲惨さを直視することは、文学や芸術といった虚構を扱う営みの得意としてきたところだと言えよう。

この特集には、戦争下の秀歌三十首選（土井礼一郎選）と、大日本歌人協会解散を決議した臨時総会の記録（中西亮太解説）も収められている。編集後記には「翼賛体制に与した歌人たちを批判することはたやすいが、戦後80年を迎える今年、足元を見つめるきっかけになれば」と記されている。批判することはたやすいが、という言葉は重い。上記の特集のいずれも優れた連作を読んで実感したのは、わたしたちは敗戦という結末を知ってしまったおり、それを知らない状態では詠えないという当然の事実である。二〇二五年の今に軍部の愚かさを非難し、銃後の生活の悲惨を、兵士の命の軽さを言うことは、じつは相対的に「たやすい」ことなのかもしれない。被害者側に自己同一化することは、おそらく加害者側に自己同一化することよりも常に易しい。けれどもわたしたちは「水の中」に浸けられると同時に、いつでもその水自体でもあるような存在なのだろう。